

『エヴェレットゴーストラインズのおもしろさとその伝わらなさ』

久保聡介

作品名：村川拓也「エヴェレットゴーストラインズ」

観劇日時：2014年10月4日（土）14時～

観劇場所：京都芸術センター2F 講堂

■ 第一部 ■

さあ今日は、村川拓也「エヴェレットゴーストラインズ」の劇評だよ！

え？

もともと2013年にアトリエ劇研で、そして今回（2014年10月）は京都芸術センター講堂での再演となる作品だね。初演の時はエヴェレットラインズという題名で上演されていて、エヴェレットというのはおそらく「エヴェレットの多世界解釈」と言って、シュレディンガーの猫の・・・

ちょ！ちょっと待って、先生！

その・・・劇評って、何？

なんだって！太郎君は劇評を知らないのかい？

知らないよ、そりゃ、劇の評、なのはわかるけどさ。そんなの読んだこともないよ。

そうか！

でも実は、先生も劇評がなんだかよくわからないんだ！

ただ、シアターアーツとか、ワンダーランドとか、そう言ったものに書かれていて、演劇をやる人や観る人がよく読んでいるのは知っているよ。

そなんだね、何のために劇評って書かれているの？

うーん、その作品の何が良くて悪かったのか、またそれはなぜなのか、を広く伝えるためかな。

なかなかハードルの高そうなことをやるんだね。

まあ、たしかに、簡単ではないよね。

あと「広く」つっても、まず僕の元には劇評は届いてないよ、先生。

そうか。それは、そうかもしれない。

いまどきPULL型のマーケティングだけでいいと思ってるの？甘いんじゃないの？

太郎君は妙に難しい単語を知ってるね・・・

ま、あんまり難しいことは先生わからないけどね。さて、今回はこの村川拓也さんの作品について話していこうってことなんだけど。太郎君は観たい？

うん、まあ。

そうか！どうだい、おもしろかったら？

いや、それが、あんまりよくわからなくて・・・

そうかな。だって、出演者未定なんだよ？まず事前に、複数の出演候補者に出演依頼の手紙が送られて来る。そこには何時何分に、どこから舞台にあがって、何をどれくらいやって、どうやって舞台から出て行くか、書かれている。そしてその出演候補者は劇場に来て来なくてもいい。

とても刺激的じゃないか！

どこが？

え？

その面白さがわからないんだよね、僕には。隣の人も上演中に本を読んでいたよ。

見ていて、スクリーンにその演出家からの指示？が表示されて。人が入って来るのかなと思ったら、誰も入ってこなくて。ただ時間だけが過ぎて。

それで、どう思った？

ああ、この人は来なかったんだなって。

それで？

それだけ。

次の指示がスクリーンに表示されるまでの間、何を考えていたの？

何も。退屈だなあーって、思ってたよ。

だってさ、フツの劇ってさ、登場する人がいてさ、面白いストーリーを展開してくれるじゃん。この作品はそんなの何もなくて。いきなり途中で忌野清志郎の言葉が表示されてさ。いつの間にか終わって。ぜんぜん感動しなかったね。

あ、でも、途中で人がダイブしたり、太っちょの人がお弁当食べたりしてたのは、少し笑えたけどね。

そうか、それは残念だなあ。

実は先生、あの作品をすごく楽しんだんだよね。はじめて出演候補者が舞台に登場しなかった瞬間、めっちゃ笑顔でニヤニヤしながらその様子を観てたしね。

えー、その感覚わからないや。

うん、そうかもしれない。そうかもしれないな。

先生だって、若い頃に同じ作品を観ていたら、同じことを言っていた気がする。

これは本当に。

へー、先生にもそんな時期があったんだね。

そうだね。そしてそれは、言い換えれば、いつか太郎君もこの作品を面白いと思える日が来るかもしれないって、ことなんだよ。

えー？ありえないよ！それに自分の価値観を人に押し付けるのはどうかと思うって、よく Twitter でエアリブされてるよ。

そうだね。劇評の難しいところはそこかもしれない。

ただ、一度読んでみて、そして演劇を観に行ってみて、それから決めるって手もあるんじゃないかな。幸いこの作品はたぶん再演するって村川さんも言っているしね。

そんなのイヤだよ。僕だって忙しいし、お金もないんだ。どうせ観るならハズレのないものを観たいな。

それはたしかに正論だ。今のこの日本には、太郎君みたいな人に、演劇の見方を丁寧に教えてくれるしくみはそんなにもないのかもしれないね。僕の知る限り、関西では地点のカルチベートプログラムくらいじゃないのかな。

うん。そうかもね。だから今、こうして先生が僕の知らない面白さのことを教えてくれるのは、ありがたいのかもと思うよ。そしてそれが劇評ってことなんですよ？

そうかもしれない。そうなれるように、僕がなぜ面白いと感じたのか、次で話してみたいと思う。

■ 第二部 ■

えっと、言いたいことは色々あって。まぎれもなくこの作品の最大の沸点は今演候補者が登場しない瞬間で。その人が現れない瞬間、自動的に観客はその人に起こっている「かもしれない話」を想像することになる。他の回には来てたかもしれない。仕事があったのかもしれない。死んだのかもしれない。

僕は想像しなかったよ。

うん。この差はなんだと思う？

先生は演劇バカだけど、僕は演劇バカじゃないから？

言葉にトゲがあるね、太郎君・・・

そうだな、たとえばパントマイムとかは知ってるかい？

うん。

たとえばマイムする人が綱引きの動作をしたら、太郎君はどう思う？

綱引いてるなって。

なんで綱もないのにそう思うんだろう。

それは・・・想像、してるから？

うん。演劇にはいろんな魅力があるけど、「あたかも〇〇のように見える」と言うのは、広い意味では見立ての一部とも言えるけど、とても重要な魅力で、その魅力ってのは、観客がいてはじめて成立するんだよね。

観客が脳内で補完することによって、舞台が成立するんだよね。

少しややこしい話だけど、マイムをする人が、1人で綱引きの動作をしても、そこには綱は存在しないんだよね。それを観客が見て、綱があるように見える時点で綱が存在するんだ。

ややこしくてよくわからないや。

つまり太郎君が「あたかも〇〇のように見える」と感じることで、太郎君の脳みそがそう感じられるように動いていること、ってのが重要で。そしてね、この話の面白いところは、観客側の意図と知識と経験によって、この「あたかも」は増幅できるって先生は思ってる。同じものを観た時に、わかんない、で済ませるのか、それとも、何かの糸口から、その面白さを感じ取るのか。

えー、何だかそれってとても難しい鑑賞方法なんじゃないの？

全然だよ！

・・・

？

てか先生、僕のことバカにしてるでしょ？

なんだって？

そーゆー難しい見方できるのが、偉いとか思ってんでしょ？

そんなことないよ！

僕のこと、何も考えてないアホなヤツだとか思ってんでしょ？

だからそんなことないって！でもひとつあるとしたら、そう言った見方を知らないってのは、もったいないなあ、とは思うよ。

そりゃ僕も何も考えないわけじゃないけどさ。なんか難しそうだし。

そうだね、言葉にすると難しいけど、やると意外と簡単かもしれない。

だって、どんな脳内補完が正しいのか、そんな学校の授業みたいな正解はないんだからね。

その割にはさっきから先生の持論に誘導されてる気がするけど・・・

それは謝るからさ、とにかくやってみてほしいんだって！

まあ、わかったよ。で、どうすればいいの？

簡単だよ！その瞬間、自分のアタマで考えてみるだけでいいんだ。

この作品の場合、脳内補完する糸口は、まさしく出演候補者が現れない瞬間だよ。誰も舞台に出てこない。この時、太郎君の目には、何が起こっているように見えるんだろうか？

うーん、いろんな「かもしれない」があるってことかな。

そのとおりだよ！特に、この作品は「かもしれない」の糸口から、思いをはせる部分が多い。観客に委ねられまくっている。

途中、すでにこの世を去った人にも出演候補者として演出家から指示が表示されるけど、あのシーンで、幽霊がああ暗闇の中、現れているかもしれない、そう考えることのできる余地を残した「空白の時間」は先生にとって、とても贅沢な時間だったな。

フツの演劇は役者が決められた時間に同じことを言うよね。そのルールが破られたからおもしろいの？

いや、そうじゃないね。だって、それは手段だから。目的は観客に「かもしれない話」を想像させることだしね。役者が来るか来ないかを、スリルをもって見届けることで、その劇場空間と現実世界とのつながりが意識されるよね。それは演劇というフィクションと現実というノンフィクションの埋まらない隙間を埋める行為なんだよね。画期的じゃない？ここ！！そして、客席に出演者が座ったり、写真を撮られたり、一緒に耳をすませてみたりされる中で、舞台上のものでしかなかった「かもしれない話」が、舞台から現実に漏れ出てくるんだよ！普段、僕らが見聞きしている現実（と思っているもの）の不確かさ、それは、東日本大震災のような不意の災害により示された「この世の中、ぜんぜん安心でも安全でもないじゃん」という認識のように実はパラレルで存在してるんだよって、そういった不確かさと隣り合わせなんだよってことが、示されるんだよね！うわー、よくできてるよね、ホント！！秀逸すぎる！！

あれ？・・・おーい。

しかも、この作品の構成バランスの良さ！これはまあ、テクニカルな話だけ
さ！ジョン・ケージみたいなハプニングとしては作らずに、ちゃんとフルクサ
スみたいなスコアとして機能させるために、強度を持ったしくみづくり（出演
依頼と指示）がされてるんだよね！作品の素晴らしさって、負荷と正の相関関
係にあるってのが、先生の持論だったんだけど、今回の作品は負荷がどこにか
かっているんだろうって考えたんだよね。今回の作品では、現実の不確実性に耐
えうるスコアにこそ、その分の負荷がかかっているんじゃないかな！村川さんは
「編集による快がある」と言っていたけど、それは、単に時間や入りハケだけ
に限らず、それぞれの出演候補者の登場確率や、現実の揺らぎの幅を含めた上
で、総合的に作品が編集された結果の快でもあるんじゃないかな、とも思うん
だよ！ピタゴラススイッチがちゃんと機能した時のような気持ち良さだよ！
そんな細部までの配慮の積み重ねなんて、ホントは観客が気にする必要はない
ところだけど、太郎君を置き去りにしてでも、これは言っときたかったんだ！
うわー、よくできてるよね、ホント！！秀逸すぎる！！

・・・うん。先生が途中から暴走したけど、話を戻すと、観客も受け身では楽しめ
ない作品があるんだなってことはわかったよ。

そう、良いことを言ったね。演劇を楽しむためには、まあ、それは芸術全般に
も言えるけど、自分でアタマ使って、深読みしながら、妄想しながら、観賞す
ると面白いんだよ。

でもそんな風に作品を観ようなんて誰にも教わらなかったよ。

うん。そうだね。美術館も基本的には会話しないのがマナーみたいになってる
しね。でも先生思うのは、アートの世界では対話型鑑賞って言うしくみが少し
ずつ広まっているみたいに、観た人同士で意見や感想を言い合いながら鑑賞した
り、観た直後に感想を言い合う場ってのは、太郎君のような人がもっと多くの
作品を楽しむためには重要なんじゃないかな。そして、まだまだ日本にはその
ための場が少ないんじゃないか、ってこと。

うん、たしかに、周りの人がどんな妄想しながら観てるのかがわかったら、僕も自
分のアタマで考えながら鑑賞するきっかけをつかめるかもね。

たとえばニコ動みたいにさ、みんなの投稿が流れる回があってもいいのかもね。

まあ、まだぼんやりしてるけど。

まあ、基本的には演劇作品はハズレが9割だからね。面白くない作品を観た時
に、そこで踏みとどまってくれと先生うれしいな。

ありがとう先生！

ところで先生、ずっと気になってたんだけど、先生は何かの先生なの？

いや？ちがうよ？ただの一般人だよ。勝手に先生と名乗ってただけだね。

やっぱり！笑

じゃあね、太郎君！

うん、さよなら先生！かもしれない人！

おわり

【上演記録】

村川拓也「エヴェレットゴーストラインズ」 (<http://kyoto-ex.jp/2014/program/murakawa/>)

京都芸術センター講堂 (2014年10月2日-5日)

演出 村川拓也

舞台監督 浜村修司、磯村令子

照明 葭田野浩介 (RYU)

音響 齋藤学 (株) STAX)

映像 嶋田好孝、小西小多郎

演出助手 山村麻由美、豊山佳美

助成 公益財団法人セゾン文化財団

製作 村川拓也

共同製作 KYOTO EXPERIMENT

主催 KYOTO EXPERIMENT

チケット料金

一般 前売 ¥2,500 / 当日 ¥3,000

ユース・学生 前売 ¥2,000 / 当日 ¥2,500

シニア 前売 ¥2,000 / 当日 ¥2,500

高校生以下 前売 ¥1,000 / 当日 ¥1,000

ペア ¥4,000 (前売のみ)